

北九州市立大学
文学部紀要

第90号

— 目 次 —

薔薇と岩

富田 広 樹 …………… 17

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2020

薔薇と岩

富田 広樹

—Yo sé quién soy — respondió don Quijote—;
Don Quijote de la Mancha, Primera parte, capítulo V

要旨

大江健三郎の小説『憂い顔の童子』のなかで作中人物のひとりが漏らす言葉は、セルバンテスの小説『ドン・キホーテ』に精通した人物として設定されている彼女にそぐわない誤謬を含んでいる。スペイン語の語彙の来歴や『ドン・キホーテ』の初版テキストに遡及しながらこの誤謬を積極的に解釈することで、作家がその作品の結末に置いた場面により複層的なハイライトをあたえた可能性を指摘する。

キーワード

大江健三郎、『憂い顔の童子』、ミゲル・デ・セルバンテス、『ドン・キホーテ』

はじめに

賞賛と模倣は、双子のようにおなじ根源から生ずるのだろう。いずれもが受容のことなる側面ではある。ピエール・メナールが、あるいはサン＝テブルモンがみずから「書く」ことを希求した物語は、その受容が高度であればあるほどにおおきな賞賛を集め、奥深い模倣を生み出すこととなった。それはもはや単純な模倣とは呼ぶことのできない、ドン・キホーテ的なるものあらたなる受肉として世にあらわれる。

ミゲル・デ・セルバンテスの不朽の名作の日本における受容は、そのはじまりにおいては、翻訳の歴史であったし、今なおそれは変わることがないだろう。遠くはなれたスペインの大部の小説が、原語からの完全な翻訳として紹介されえたのは、正編の出版から三五〇年以上後のことで、日本語での最初の言及からかぞえて、じつに七〇年ちかい時間を要した。それまでの間接的かつ断片的な伝聞と紹介の結果、文学的トピックとしての『ドン・キホーテ』像が生成されてきたことは想像に難くない。これが直接的な受容の障壁となったことは、今日数多くの読者がタイトルは、あるいは例の風車の挿話は知っているがじっさいに作品を通読したことはない、という状況にどこか似通っているかもしれない。

しかし、一般的な読者以上に精緻かつ繊細な読みの実践者である一群の作家たちにあっては、そ

の実作の成果のうちにセルバンテスの傑作の大きな影響を認めることができる。それは直接的な影響というよりも、文学史に燦然と輝く金字塔としての『ドン・キホーテ』を明瞭に意識しながら、フィクションという無辺際の舞台上で展開される競演と呼ぶにあたいする挑戦である。

ここでは、大江健三郎がその「晩年の仕事」と位置づけた作品のひとつ、『憂い顔の童子』における『ドン・キホーテ』との関係をテキストに即くというきわめて文献学的な関心から論じてみたい。

薔薇の誤謬

一九九四年、ノーベル文学賞を授与された大江は連載中であった『燃え上がる緑の木』の完成（一九九五年）をもってこれを最後の小説としたが、一九九九年より執筆活動を再開し、これ以降の作品については、親交の深かったパレスチナ出身のアメリカ合衆国の比較文学者エドワード・W・サイードの用語を用いて自身の「晩年の仕事（late work）」と位置づけている。

この時期の一連の作品は、著者自身をモデルとした長江古義人（やその子供たち）を主人公に据え、自身の過去の作品（言及に際して作品タイトルはわずかに改変されているが、それらが大江の作品を指すものであることは疑う余地がない）や世界文学作品への膨大な言及を含んでいる。とりわけ『取り替え子』、『憂い顔の童子』、『さようなら、わたしの本よ！』の三作品については、著者自身が「おかしな二人組」三部作という括り方をして、特別の位置をあたえてさえいる（二〇〇六年には三冊をセットにした特装版が発売された）。

「おかしな二人組（Pseudo-Couples）」とは、フレドリック・ジェイムソンがサミュエル・ベケットを引いて大江の『宙返り』を書評するにあたって用いた語であるが¹、この語に積極的な価値をあたえることによって大江は、自身がこれまでに語りえなかったことを物語る縁^{よすが}としているのである。それはのちに発表される『臆たしアナベル・リイ、総毛立ちつ身まかりつ』や『水死』においても変わることがない。

三部作の第二作にあたる『憂い顔の童子』はその標題においてすでにラ・マンチャの騎士のふたつ名すなわち憂い顔の騎士を用いているが、この作品の中で大江はミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』を物語の展開を助ける導きの糸としてある時点まで意図的に利用している。

『憂い顔の童子』は主人公長江古義人が四国の郷里に母親から遺贈された土地へと移り住むところから始まる。その生活は、古義人の作品についてのモノグラフを著すべくやってきたアメリカ人のローズという女性と、知的障害を持つ息子との共同生活である。古義人はそこで幼年時代の分身であった童子についての伝承を調査しながら、ある日自分を残して忽然と姿を消してしまった童子の正体を追いかける。

¹ Jameson, Fredric. "Pseudo-Couples." *London Review of Books*. Vol. 25, No. 22 (20 de noviembre de 2003). pág. 21.

ローズは複数の外国語に通じたインテリ女性として設定されている。日常生活を送るうえでの日本語に不自由することはなく、母語である英語のほか、フランス語（古義人の作品の仏訳を参照している）²、そしてスペイン語についても相当の知識を有している。彼女は『ドン・キホーテ』に関する修士論文を執筆したことがある、いうなれば『ドン・キホーテ』を読みつけてきた女性なのである。さらにノースロップ・フライに教えを受けたことがあり³、数多の理論で武装されたプロの文学研究者、カルロス・フェンテスの言葉を引用して彼女がいうところでは、「読みの専門家^{レクトゥーラ}」⁴なのである。

彼女には古義人をめぐって持ちあがる騒動や、関係する人々をことあるごとに『ドン・キホーテ』の作中人物になぞらえて把握するという特徴がある。かくして彼女は、不識寺の住職松男をドン・キホーテと同郷の司祭（と床屋）に、三島神社の神主真木彦を『ドン・キホーテ』後編に登場する学士サンソン・カラスコに見立てるなどして、ことあるごとに古義人の生活に入り込んでくる『ドン・キホーテ』の影を認めるのである。さらに彼女は古義人と自分の関係をドン・キホーテ主従のそれになぞらえ、従士サンチョの名前を女性形にして「サンチャ」を以って任じている⁵。いっぽう、サンチャの主人である（と、すくなくともローズがそう考えている）当の古義人は、みずからを積極的に騎士に重ねることはない。

古義人は考えた。おれはD. Q. タイプの少年だったか？ 応えはNO！ コギーはD. Q. タイプの幼児だったから、森に昇って「童子」になることができた。おれは「童子」になれなかったばかりじゃなく、D. Q. に準じるものでもなかった⁶。

『ドン・キホーテ』を準拠枠とした解釈はおもにローズの側からもたらされる。ここで起こっていることは、騎士道小説の読みすぎから自らを遍歴の騎士と考えるにいたった狂人とその従士サンチョ・パンサの関係の逆転である。『ドン・キホーテ』において、妄想（騎士道小説を準拠枠とした現実の解釈）はドン・キホーテによってもたらされ、サンチョは幾度となくそれに懐疑を差し挟むのだが、『憂い顔の童子』では『ドン・キホーテ』を繰り返し読み（研究し）、みずからが従士サンチョ（サンチャ）であるという考えにとり憑かれたローズが、『ドン・キホーテ』になぞらえて現実に起こる出来事に解釈をあたえ、ドン・キホーテの座に据えられた古義人がそれに従う。その意味では、『憂い顔の童子』において、ドン・キホーテはサンチョ的であり、サンチョはキホーテ

² 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、五一頁。

³ 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、八二―八三頁。

⁴ 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、二八六頁。

⁵ 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、三五〇頁。

⁶ 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、二〇三頁。

的であるといえよう。

しかし作品の終わり近く、大怪我を負って病院に搬送された古義人をベッドサイドで見守るローズは、その人生において『ドン・キホーテ』を繰り返し読んできた女性としてはいささか奇異に思われる言葉を口にする。

そうだ、ドン・キホーテと苦難を共にする運び手の名前はロシナンテ。そのスペイン語表記が Roci- と始まる以上、岩、Roca とは結びえても薔薇、Rosa とは関係がないけれど、自分の名前と音では近いのが嬉しい……そういつていた⁷。

ロシナンテは、あまねく知られたドン・キホーテの乗り馬の名前で、スペイン語では Rocinante と綴られる。そこでローズは Roci- という部分から Roca へと連想を働かせている。しかしここに述べられている様に、ロシナンテは岩、Roca と結びえるのだろうか。

表記の上では似ているが、音韻の面からみれば Roca と Roci- は関係がない。スペイン語では母音 i と e の前で c が無声歯摩擦音（英語の th に相当する発音）になるため、Roca に含まれる /k/ の音にはならない。異なる音素から両者の結びつきを考えることは難しい。

直後にローズはロシナンテと自分の名と同義のスペイン語 Rosa が「音では近い」というが、おなじ理由からこれもまた正確ではない。たとえローズの話すスペイン語の発音がそれに近いものであると考えるとしても（とはつまり、ラテンアメリカにおけるその影響を受けていると考えるとしても）、一六、一七世紀のスペイン語の発音をこの瞬間のみにおいて都合よく忘却するには、彼女はあまりにも『ドン・キホーテ』を知りすぎた読者である。

ロシナンテと岩に話を戻せば、語源的にも Roca と Rocinante は結ばれない。ロシナンテの語源は「痩せ馬」や「価値の低い馬」を意味するロシン（Rocín）と という単語である。ネガティブな含意もあるが、「痩せ馬なるもの」というように「痩せ馬」であることを仰々しくした名である。ドン・キホーテ自身の弁によれば、ロシナンテの音の中に含まれる「アンテ」の部分「以前」という意味なので、「かつて駄馬であったもの」という洒落になっている。

かくして記憶をたどり、想像をはたらかせて、数多くの名前をこしらえたり、消したり、削ったり、付け足したり、こわしたり、またでっちあげたりしたあげく、ついにロシナンテと呼ぶことにした。彼の見るところでは、崇高にして響きの高いこの名はまた、この馬が以前は駄馬^{アンテス} ^{ロシン}であったことを示すと同時に、現在は世にありとある駄馬^{ロシン}の最高位にある逸物^{アンテス}であることをも

⁷ 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、五九六頁。

表わしているのがあった⁸。

ここにある Rocin の語源について、スペイン王立アカデミアの編纂する辞典は不確かであるとしているが⁹、フランス語にも「駄馬」を意味する Rosse という語がある¹⁰。A.J. グレマスの編纂した古フランス語辞典には「馬」を意味する語として Ros が収載され、その起源を Ross というドイツ語としている¹¹。『グリム・ドイツ語辞典(*Grimm Deutsches Wörterbuch*)』は古代高地ドイツ語(七五〇年から一〇五〇年頃)の hros あるいは ros をその語源として説明する。英語の horse の語源である。

馬を意味するゲルマン系の単語がフランス語を経由してか、あるいは西ゴート王国の時代、つまり六世紀から八世紀初めまでにゲルマン民族がイベリア半島の一部を支配していた時代に、Ross やそれに類した言葉として入ってきた可能性はあろう(ただし、スペインに侵入したゲルマン民族のあいだではすでにラテン語とキリスト教が採用されていた)。スペイン語で馬を意味する単語はラテン語の Caballus に由来する Caballo であるから、「馬」の意味ではこちらが存続し、Ross については、示小辞の -in が付されたものが Rossin となり、Rocin に変化して、「駄馬、痩せ馬」の意味でのみ残ったものかもしれない。

この類推を直接裏づけるものではないが、アカデミアの最初の辞典(一七二六—三九年刊行の『権威の辞典(*Diccionario de Autoridades*)』)では、セバスティアン・デ・コバルピアスが編纂した『カスティーリャ語、あるいはスペイン語の宝典(*Tesoro de la lengua castellana, o española*)』(一六一一年)を引証しながらドイツ語起源の可能性を示している。なお、これ以降のアカデミアの辞典では、この記載は消えてしまう。

いずれにせよ、ロシナンテ(Rocinante)と岩(Roca)が結びつくというローズの見解に疑問が残ることはたしかである。しかしローズの名前(薔薇)から岩への連想を作家の不手際として簡単に片づけることは、正しくない。唐突に思われるやり方で薔薇と岩が持ち出される理由は何か、そのことを問う余地が十分にある。というのも、ローズの勘違いには作家が戦略として作品に取り入れられた文学的仕掛けとしての可能性があるからだ。

見出された処女／童子

『憂い顔の童子』冒頭にはエピソードとしてつぎの一文が挙げられている。

⁸ セルバンテス『ドン・キホーテ 前編』牛島信明訳、岩波文庫、二〇〇一年、第一巻、五一頁。

⁹ Real Academia Española. *Diccionario de la lengua Española*. Madrid: Espasa-Calpe, 2001. pág. 1981.

¹⁰ *Le Robert. Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*. Paris : Société du nouveau Littré le Robert, 1970. T. VI, pág. 70a.

¹¹ Greimas, Algirdas Julien. Ed. *Dictionnaire de l'ancien française : jusqu'au milieu du XIV^e siècle*. Paris: Larousse, 1968. pág. 572.

—Yo sé quién soy – respondió don Quijote—;

「わたしは自分が何者であるか、よく存じておる」と、ドン・キホーテが答えた。

(Editorial Castalia 版／牛島信明訳)¹²

『ドン・キホーテ』前編第五章からの引用で、岩波文庫に収められた牛島信明による訳が付されている。ここで注意したいのは、スペイン語テキストがエディトリアル・カスタリア (Editorial Castalia) 版から引かれていることである。『ドン・キホーテ』後編の解説に記しているとおり、牛島は翻訳にあたってグレードス (Gredos) 版を底本としている。必要に応じて複数の版と翻訳を参照してはいるが、ルイス・アンドレス・ムリーリョ (Luis Andrés Murillo) の校訂になるこのカスタリア版はそのうちのひとつにすぎない。つまり、作家は単純に牛島の訳を介してのみ『ドン・キホーテ』を読んだのではないということである。翻訳をつうじた読書について、作家はつぎのように述べている。

それを考えると、私が生活のやはり大きい部分をあてている、本を読むことも、外国語の翻訳である場合、つねに原文をあわせて読む——翻訳のない場合は原書から始める——のですし、それは自分の中で日本語と外国語を突き合わせ続ける作業ですから、やはり言葉のエラボレーションというほかにはないのです¹³。

ここにある「外国語の翻訳である場合、つねに原文をあわせて読む」という言葉を踏まえれば、作家が『ドン・キホーテ』を読むにあたって翻訳だけでなく原文を参照し、しかもその際にカスタリア版を参照したと考えてよいだろう。そして、私たちがここで問題にしているローズの誤りそのものが、スペイン語のテキストに直接あたっていなければ起こりえないものなのである。

先述したとおり、スペイン語ではロシナンテを **Rocinante** と綴る。作家の精通しているフランス語、英語、あるいはおそらくあまり縁がないであろうドイツ語では『ドン・キホーテ』の翻訳においてロシナンテを **Rosi-**、**Rossi-** というように **s** で綴る。したがって、スペイン語のテキストを確認していない限り、**c** で綴られるロシナンテに出会う可能性はゼロに近いのである。つまり、ローズの犯した誤りにそもそも思いいたることがない。そして、この誤りについて私たちが試みるより積極的な解釈においても、作家がオリジナルのテキスト (スペイン語というばかりではなく、その初版

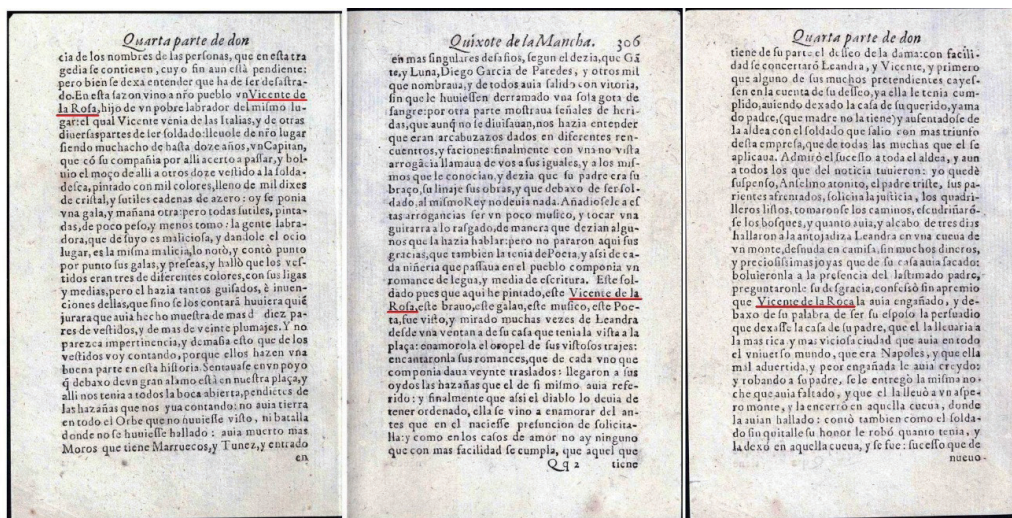
¹² 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、一〇頁。

¹³ 大江健三郎『シンク・トーク シンク・ライト 「話して考える」と「書いて考える」』集英社文庫、二〇〇七年、八頁。

という意味もあわせて)を参照した事実がきわめて重要な役割を果たす。なぜならば、そこにおいてのみ薔薇と岩は結びつくからである。

『ドン・キホーテ』前編の第五章において、ドン・キホーテ一行は山羊飼いの物語に耳を傾ける。村の美しい娘レアンドラが伊達男ビセンテ・デ・ラ・ローサと駆け落ちし、彼に財宝を奪われた後、洞穴に置き去りにされて発見されるというエピソードである。

当然のことながら、この駆け落ちは村中を驚かせ、これを知ったすべての人びとを仰天させました。〔中略〕やっと三日目になって、ある山中の洞穴にいる気まぐれなレアンドラが見つけ出されたのですが、その時の彼女は下着だけのしどけない姿で、家から持ち出した大金や貴重な宝石はすっかり失っておりました。〔中略〕世間知らずの彼女はすっかり口車に乗せられて彼の言うことを信じてしまい、父親のもとから金品を盗み出して、それを家出したその晩に彼に渡したこと、そして、彼が彼女を険しい山の奥に連れこんで、あの洞穴の中に閉じこめたことなどを打ち明けたのです。彼女はまた、あの兵士が自分の持ち物を奪っただけで、操を汚すことではなく、そのまま洞穴に置き去りにして立ち去ったとも付け加えました¹⁴。



『ドン・キホーテ』初版（スペイン国立図書館蔵）下線は筆者

一六〇五年に発行された『ドン・キホーテ』初版において、本文中で三度フルネームが挙げられるこの男の名には、画像で示したとおり異同がみられる（下線による強調は筆者）。具体的には

¹⁴ セルバンテス『ドン・キホーテ 前編』牛島信明訳、岩波文庫、二〇〇一年、第三巻、三四二―三四三頁。

三〇五裏ページから三〇六裏ページにかけての箇所、ビセンテ・デ・ラ・ローサに言及があるのは前後編あわせた『ドン・キホーテ』全体でこの章のみだが、初版テキストにおいて Vicente de la Rosa と Vicente de la Roca が混在しているのである。なお、このテキストを印刷したフアン・デ・ラ・クエスタ (Juan de la Cuesta) は一六〇八年の版でこれらすべてを de la Roca に改めているが、この版についてはセルバンテス自身が目をとおしたともいわれている¹⁵。

ここにあらわれる de la Rosa という苗字が一般的なものであるのに対し、de la Roca という苗字はカスティーリャ語 (いわゆるスペイン語) では通常みられないものである。Roca 単独であればカタルーニャ地方におおく見られる苗字ではあるが¹⁶、いっぽうの de la Roca という形は一般的ではなく、くわえて『ドン・キホーテ』前編で主従はラ・マンチャ地方の外へ足を延ばしていないことから、あえてカタルーニャ風の苗字を入れたと考えるのも不自然なことである¹⁷。もちろん、文学作品中のことであってみれば、どのような名前が用いられていたとしても、そのことに異議をとる意味はない (たとえば長江古義人のそれのように)。しかしここでは、一六〇八年の版が表記の統一をはかっていることから、いっぽうが誤植によるものであったと考えるのがもっとも無理のない解釈である¹⁸。いずれにしても、これこそが『ドン・キホーテ』全体を通じて薔薇と岩が交錯する唯一の箇所である。

作家が直接原文のテキストにあたったことが重要性を持つのは、この局面においてである。というのも、牛島の翻訳ではこうしたことが一切反映されずに一方の読みが採択されてしまうのだが¹⁹、大江が参照したと考えられるカスターリア版には、まさしくこの異同を示す注が付されているのである²⁰。

すでに述べたとおり、『ドン・キホーテ』前篇第五章で語られるエピソードは、駆け落ち相手 (ビセンテ・デ・ラ・ローサ) に置きざりにされた美貌の村娘 (レアンドラ) が洞穴の中で発見される、というものである。そして、このエピソードは、『憂い顔の童子』の結末近く、幼年期の回想として、暗い水のなかの岩の括れ (それは小さな洞穴といえるだろう) に頭を挟まれた古義人が大きいものの手によって「こちら側」に引き戻されることと相似形をなしている。

¹⁵ Rico, Francisco. “Esta edición.” Miguel de Cervantes, *Don Quijote de la Mancha*, Ed. Francisco Rico. Barcelona: Crítica, 2001. pág. CXVI.

¹⁶ カタルーニャ地方の苗字については、バルセロナ自治大学のブライ・グアルネ教授に有益な示唆をいただいた。記して感謝申し上げたい。

¹⁷ 『ドン・キホーテ』後編で主従はバルセロナへ足を向け、そこで銀月の騎士との戦いに敗れる。

¹⁸ 『ドン・キホーテ』のなかでは主人公の名前 (郷土の本名) から、サンチョの妻の名前までセルバンテスが意図的に、あるいは意図せずして盛り込んだ異同が見られる。

¹⁹ 牛島訳は「デ・ラ・ローサ」としているが、ほかの訳者によるそれまでの訳では「デ・ラ・ローカ」が主流を成している。なお、牛島はこの選択の理由について一切の説明をしていない。

²⁰ Cervantes, Miguel de. *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*. Ed. Luis Andrés Murillo. Madrid: Castalia, 1978. pág. 592, n. 3.

子供の自分がなぜあれだけの危険をおかし、大岩の括れまで頭を潜らせたのだったか？ 括れの奥には大きい壺を横にしたような視野が開けて、淡い光に照らされた数十尾のウグイが泳いでいる。一方向を指し、水の流れと等速で静かに泳いでいる銀灰色をおびた青いウグイ。数十の小さな頭のこちら側の黒い点をなす数十の眼に、ひとりの「童子」の顔が映っている²¹。

「見出された童子」と題されたこの終章において、魚たちの眼球に映じた自分自身の姿こそがほかならぬ童子であったことを思い出す重要な場面である。数十尾のウグイの目に映る「童子」としての自分を取り戻した古義人が、大きいもの、つまり母親の手で苦しい生に引き戻される。それは、暗い水、岩の括れという子宮の暗喩から明らかに読み取れるように、痛みを伴って産み落とされる古義人の自我（コギト）の取りかえしにほかならない（『取り替え子』で女達が吾良を産み直すことで取りかえそうと試みたことを想起せよ）。洞穴で発見されるレアンドラと古義人を結びつけるものとして、『ドン・キホーテ』の中で唯一薔薇と岩が交錯する一点へ物語が収斂する。その契機がローズの誤りによる、ロシナンテを媒介とした薔薇と岩の連想なのである。

「大丈夫、大丈夫、殺されてもなあ、わたしがまたすぐ生んであげるけのう！²²」死んでもなお生まれ変わる。あるいは新しく産み直される、ということが作品の重要な主題であることは間違いない。それは古義人の追いかける伝承や母親の言葉のなかで幾度となく繰り返され、また三部作の第一作『取り替え子』がスペイン語に翻訳されるにあたって *Renacimiento*、すなわち『再生』とされたことについて『エル・パイス』紙とのインタビューにおいて大江が理解と賛同を示したことにも明らかである²³。

「下着だけのしどけない」姿であったにもかかわらず、興味深いことにレアンドラは処女のままだ、無垢な状態で発見される。それはすなわち、新しく生まれたものと等価ということにほかならない。洞窟をくぐって、主人公がみずからの分身に別れを告げ、あるいはみずからがその分身となって新しく生まれる場面にもっともふさわしいエピソードといえよう。とすれば、大江の作品とセルバンテスの作品がこの箇所で交錯することは、けっして偶然とは考えられないのである。

²¹ 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、五八九頁。

²² 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年、七一頁。

²³ Kenzaburo, Oé. “El gesto del hidalgo.” *El País*. 23 de enero de 2010. [http://elpais.com/diario/2010/01/23/babelia/1264203847_850215.html]

参考文献

欧文

Cervantes Saavedra, Miguel de. *El ingenioso hidalgo Don Quixote de la Mancha*. Madrid: Juan de la Cuesta, 1605.

———. *El ingenioso hidalgo Don Quixote de la Mancha*. Madrid: Juan de la Cuesta, 1608.

———. *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*. Ed. Luis Andrés Murillo. Madrid: Castalia, 1978.

———. *Don Quijote de la Mancha*. Ed. Francisco Rico. Barcelona: Crítica, 2001.

Greimas, Algirdas Julien. Ed. *Dictionnaire de l'ancien française : jusqu'au milieu du XIV^e siècle*. Paris: Larousse, 1968.

Grimm, Jacob y Wilhelm Grimm. *Deutsches Wörterbuch*. Gütersloh: Bertelsmann Lexikon Verlag, 1997.

Jameson, Fredric. "Pseudo-Couples." *London Review of Books*. Vol. 25, No. 22 (20 de noviembre de 2003). págs. 21-23.

Le Robert. *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*. Paris : Société du nouveau Littré le Robert, 1970.

Oe, Kenzaburo. "El gesto del hidalgo." *El País*. 23 de enero de 2010. [http://elpais.com/diario/2010/01/23/babelia/1264203847_850215.html] (9 de febrero de 2020)

Real Academia Española. *Diccionario de Autoridades*. Madrid: Real Academia Española, 1726-1739.

———. *Diccionario de la lengua española*, Madrid: Espasa-Calpe, 2001.

Shimizu, Norio. "Andanzas y peripecias de don Quijote en Japón." [Conferencia inaugural del ciclo «El Quijote en Asia»], Casa Asia, Barcelona, 17 de junio de 2005. [<http://www.casaasia.es/pdf/750584152AM1120545712575.pdf>] (9 de febrero de 2020)

邦文

大江健三郎『憂い顔の童子』講談社文庫、二〇〇五年。

——『シンク・トーク シンク・ライト 「話して考える」と「書いて考える」』集英社文庫、二〇〇七年。

サイード、エドワード・W『晩年のスタイル』大橋洋一訳、岩波書店、二〇〇七年。

セルバンテス、『ドン・キホーテ』牛島信明訳、岩波文庫、二〇〇一年。

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 90 March 2020

CONTENTS

Rosa / Roca

Hiroki TOMITA 17

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2020